



鳥 37 (4) 1989 年より転載

5 代会頭 山階芳麿 YAMASHINA Yoshimaro

1900 (明治 33) – 1989 (平成元). 会頭在任期間 1963–70

唐沢孝一 (都市鳥研究会)・中村 司 (山梨大学名誉教授)

1900 年、東京市麹町区で山階宮菊麻呂の次男として生まれる。元皇族。昭和天皇とは従兄弟の関係にある。生家の恵まれた環境 (約 5500 坪の敷地) で育ち父親の影響もあり幼少の頃から鳥への関心が強かった。しかし、宮家次男という立場から学習院中等科のとき陸軍への道を進むことになる。陸軍士官学校を卒業し、陸軍少尉に任官、砲兵将校となる。しかし、動物研究への願望絶ち難く、ついに軍を退役し 1929 年東京帝国大学理学部動物学科に入学し本格的に動物学を学んだ。

山階の業績は膨大かつ多岐にわたるが、山階 (1984, 85)・森岡 (1989)・黒田長久 (1989)・浅野 (1989) 等を参照し要約すると、日本の鳥類の分類と生物地理学的研究を行う第 1 期、細胞遺伝学による新分類学を提唱した第 2 期、鳥類保護と普及活動に尽力した第 3 期に分けられる。以下に 1~3 期の業績を紹介する。

山階は 1931 年に東京帝国大学での研究を修了。翌年より自宅で鳥類を研究する目的で敷地内に「山階家鳥類標本館 (後の山階鳥類研究所)」を設立した。同時に禽舎を建て鳥類の飼育を行い本格的に分類と生物地理学的研究に取り組んだ。国内外から収集した鳥類標本は 3 万 1000 点、鳥の卵 2000 点、哺乳類標本 1100 点に及ぶ。こうした標本収集や現地調査等による研究の集大成として『日本の鳥類と其生態』(第 1 巻 1933, 第 2 巻 1941) を著す。本書は「総論で鳥類の形態・生態・分類を、各論では日本産鳥類について著者が実際に飼育して得た知見も加え、文章と精緻な図を用いて詳説」, 「研究者の間では現在も山階図鑑の名で活用されている」(山階鳥研 NEWS 1999)。その質の高さは群を抜いている。その後、昭和 20 年 5 月 23 日夜から 24 日にかけての渋谷空襲により自宅や禽舎は灰塵に帰した。しかし、貴重な標本資料は戦災を免れ、1984 年には研究所と共に千葉県我

孫子市に移転し保管されて今日に至る。

山階の第二の業績は、鳥類の分類に染色体による分類法を導入したことである。1939 年より北海道帝大の小熊捍教授の指導を受け鳥類の雑種による不妊性の研究に取り組み 1942 年に学位を取得した。1947 年には鳥類の分類に染色体による分類法を導入し、研究の集大成として『細胞学に基づく動物の分類』(1949) を上梓。これにより翌 1950 年には遺伝学会賞 (日本遺伝学会) を受賞した。

第三の業績は、鳥類関係の団体・組織の要職に就き鳥類保護と保護思想の普及に尽力したことである。本会では黒田長禮の後任として会頭 (1963–70) をつとめ、「日本鳥類目録」改訂第 2 版から 5 版まで共著編集を行う。日本鳥類保護連盟会長 (1984)、国際鳥類保護会議副会長、同アジア部会長などを歴任する。

森岡 (1989) は「(1~3 期の) そのどれも一人の人が生涯かけてもできない成果をあげられたことは驚嘆に値しよう」とその偉業を称えている。1966 年紫綬褒章、1977 年ジャン・デラクール賞、1978 年オランダ王室からの第一級ゴールデンアーク賞を受賞。とりわけ鳥学のノーベル賞とも言われているジャン・デラクール賞は、1967 年国際鳥類保護会議 (ICBP) が設けたもので、Ornithology (鳥学)、Conservation (保護)、Aviculture (保護のための増殖) の三つの分野において、すべてに世界的な貢献をした人に授与される。設立以来今日まで山階を含めて受賞者は 4 名のみである。この賞について山階 (1984) は「最近の鳥の研究、保護、飼育が分化してしまい、研究者は狭い範囲の研究ばかり、保護をする人は保護ばかりとなっているが、鳥類の研究、保護、飼育は本来、総合してやるべきものであり、今後もっと幅の広い指導的人物を育てなければならない」と述べ後進をエンカレッジしている。